

市立博物館 20 年の歩み [No.2] ～民俗分野の教育普及活動～

加藤 隆志

当館は、昭和 56 年（1981）4 月に教育委員会社会教育課（当時）内に博物館準備係を置いて正式に建設準備を開始以来、14 年 8 カ月弱の準備期間を経て平成 7 年（1995）11 月 20 日の市制記念日に開館し、今年度で 21 年目を迎えた。その間、常設展示や特別展・企画展はもとより、さまざまな教育普及活動や資料の収集・整理保管、調査研究等、多方面な活動を展開してきた。

館での活発な活動の状況については「年報」に記載されてきたが、当館の年報は基本的に館内で作成・印刷したもので、事業の説明や視察対応などのごく限られた機会に使用されるのみとなっている。これらの年報は、博物館ホームページ上の「博物館の概要」の中に、平成 7 ～ 12 年度まではスキャン画面、13 年度以降は PDF ファイルで公開されているものの、当然のことながら年度ごとの収録となっており、例えば展示などの個々の活動の流れを見る場合は煩雑である点は否めない。本誌前号では各年度に実施した特別展・企画展・収蔵品展についての内容等をまとめ、特記事項として簡単なコメントを付したが、本号では引き続き、講演会や講座等の教育普及活動を中心とした活動について記していくことにしたい。ただ、館が実施してきた教育普及活動は膨大かつ多岐に及び、言うまでもなくすべてを扱うことは不可能であり、ここでは筆者が担当してきた民俗分野を中心として、前号と同様に年報の記載に基づいて平成 7 年度から 28 年度までの各年度の教育普及活動等をまとめていくが、個々の事例については例えば参加者数など不明な点もあることを予めお断りしておく。教育普及活動としては、このほかにも学校や公民館への講師派遣や資料の貸し出しなども活発に行ってきたが、ここでは省略する。また、講座等の活動は後述のように、単年度に留まらずに数年間に渡って行ったものが多数あるため、年度ごとに別々に記載するのではなく、活動内容別にまとめて記していくことにしたい。

（1）講座

当館では、各分野が毎年一つ以上の講座（何らかのテーマを持ち、定員を定めて担当学芸員も講師等で係わる形態のもの）を実施することを決まりとして出発したが、

平成 7 年 11 月の開館ということで 7 年度は三つの講座が開催され、当館第一号の講座となったのが民俗講座である。民俗講座では、7 ～ 9 年度の三年間は「地域文化を考える」をテーマとして設定した。

○7 年度 「地域文化を考える① 農具の形態差から見る地域文化」・延べ参加者 158 名。

平成 7 年度では、開館直後（8 年 1 ～ 2 月・全四回）ということもあり、民俗学全般の視点を示す内容とともに、常設展示に多数展示されている鋤やクルリボウ（唐竿）といった農具を資料とし、これらの形態等の地域差から読み取れる民俗的な特徴を取り上げた。

第 1 回「展示〈くらしの姿〉について」・第 4 回「地域と農具」加藤、第 2 回「伝承文化の捉え方」井之口章次前杏林大学教授、第 3 回「民具について」小川直之國學院大學講師

○8 年度 「地域文化を考える② 相模川を考える」・延べ参加者 256 名。

同年度に実施した企画展「川と生活～相模川と人々のくらし～」と関連させ、相模川流域の漁法を中心とした民俗を捉える。

第 1 回「文化財記録映画〈舟を作る～相模原の舟大工～〉・〈相模原の川漁〉上映と解説」加藤、第 2 回（公開講座）「歴史学から見た相模川」神崎彰利当館館長、第 3 回「民俗学から見た相模川」小川直之國學院大學助教授、第 4 回「流域による漁法の違いに見る川と民俗文化」加藤・小川とともに堀内 眞富士吉田市教育委員会市史編さん室主査を加えて、相模川上流～下流域の漁法の違いをそれぞれ指摘した。

○9 年度 「地域文化を考える③ 相模原の食事」・延べ参加者 60 名。市域及び周辺地域のかつての食物や食事等を含めた食文化について考える。

第 1 回「相模原の食事」・第 4 回「酒まんじゅうの民俗」加藤、第 2 回「栄養的に見た相模原の食事」寺嶋則子相模女子大学助手、第 3 回「雑穀から見た食文化」増田昭子立教大学講師。

○10 年度 「フィールドワーク入門」・延べ参加者 117 名。現地を自ら歩きながらさまざまな問題を調べていくフィ

ールドワークについて学ぶとともに、実際に中央区上溝・南区下溝地区を歩く。

第1回・第5回加藤、第2回「フィールドワークの思想と方法」小川直之國學院大學助教授、第3回上溝地区フィールドワーク（随行・畠山 豊町田市立博物館学芸員）、第4回下溝地区フィールドワーク（随行・小川直之）。第3回・第4回のフィールドワークにはもちろん加藤も参加している。

7～9年度は座学の講座であったが、10年度からは博物館の活動の特色を生かした地域を歩くフィールドワークを主体とした講座に変更し、さまざまな地区やテーマの基に歩いていく講座を展開しており、その準備として「フィールドワーク入門」を実施した。

○11年度 「フィールドワーク・村を歩く」全8回（6月から開始したため9回の予定が1回は雨天中止）・延べ参加者234名。新戸・磯部・当麻・田名・大島地区のフィールドワークと8月は田名の獅子舞見学。

○12年度 「フィールドワーク・村を歩く」全12回・延べ参加者387名。上溝・下九沢・上九沢・下溝・麻溝台地区のフィールドワークに加え、近隣の「絹の道」として著名な八王子市鏈水（随行・佐藤 広八王子市郷土資料館長）のフィールドワークと下九沢の獅子舞・田名の祭の見学を行った。また、野外が雨天で中止になった場合は館内で関連する勉強会を実施した。

○13年度 「フィールドワーク・村を歩く」全9回・延べ参加者225名。上鶴間・鶴野森・淵野辺・矢部新田・上矢部・小山・清兵衛新田・橋本・相原地区のフィールドワーク。終了時には、11年度からのフィールドワークに配布した資料を収めた全体の記録と、参加者の感想を収録した冊子を作成した。

10年度の「フィールドワーク入門を受けて、翌11年度からは基本的に毎月1回、相模原市域（合併前の旧市域）の古くからの集落を歩いていく「フィールドワーク 村を歩く」を開始し、参加者とともにすべて加藤が講師となって実施した。最初のフィールドワークとしてこのような内容の講座としたのは、刻々と移り変わっている市域の様相を比較的短期間のうちに通して見ておくことは、今後のさまざまな活動に役立つと考えられたことによる。なお、この講座については、本誌第11集において「本館における教育普及活動の展開と課題—民俗講座「フィールドワーク・村を歩く」を例として—」（2002年）で報告している。

○13～14年度 「大山道を歩く」全7回（14年2月～4月・隔週で実施）・延べ参加者211名。講師は加藤とともに第3・4回は大野一郎厚木市郷土資料館学芸員、第5・

6回は浜野達也平塚市博物館学芸員が随行した。

「フィールドワーク・村を歩く」が13年12月に終了したため、同年度中に始めたのが「大山道を歩く」である。多くの参拝者を集めた相州大山へ到る道は通称大山道として各地に見られるが、相模原市域にもいくつかの道が通じている。そのうちの一つである緑区橋本から中央区上溝、南区当麻を通り、厚木市・伊勢原市を経て現在の大山阿夫利神社下社まで、途中の神社や寺院、小祠小堂、石仏等を見学しながら歩いていったものである。ちなみに「大山道を歩く」は山道等も歩くということで定員30名で募集したが約五倍もの申し込みがあり、館が行ったさまざまなフィールドワークを伴う講座の中では倍率からすると最多の応募があったものである。

○14年度 「鳩川下流を歩く」全3回（15年2月～3月）・延べ参加者63名。

引き続き、「大山道を歩く」が14年度の年度当初に終了したため、次の講座との関係で短期で行ったものが「鳩川下流を歩く」である。相模川の支流である鳩川流域を、南区下溝から座間市及び鳩川が相模川に合流する海老名市上郷までフィールドワークを行った。

○14～17年度 「道祖神を調べる会」全40回。

14年度全5回・延べ参加者287名。講師は加藤のほか、第3回佐川和裕大磯町郷土資料館学芸員、第5回倉石忠彦國學院大學教授。

15年度全14回・延べ参加者509名。講師は加藤のほか、第12回（後述の日曜講演会を兼ねる）浜野達也平塚市博物館学芸員、第15回入江英弥 國學院大學兼任講師、第17回大野一郎厚木市郷土資料館学芸員。

16年度全12回・延べ参加者450名。

17年度全11回・延べ参加者311名。

14年度には「鳩川下流を歩く」と併せて、17年度まで全40回に及ぶ「道祖神を調べる会」を開始した。講座の名称を「調べる会」としたのは、それまでの民俗講座では担当者である加藤と参加者が一緒に野外に出て、歩きながら主に加藤が民俗学的な観点から説明を加えていたため、参加者は受動的な側面が強いままであるのは代わりがない。そこでフィールドワークを取り入れた講座を開始して数年が過ぎ、地域のさまざまな民俗を参加者自らが調べていくようなものも取り入れたいと考え、その点を明示して募集した。この講座は、市域及び周辺地域の道祖神石碑並びに関係行事のフィールドワークと館内での勉強会を行う一方、市内各地で1月に実際に行われている「団子焼き」（どんど焼き・サイトバライ）行事や道祖神石碑を参加者自らが調べるといったもので、実際に16年・17年・18年1月の行事を調査し、その成果は

本誌第 14 集～16 集において「市民が調べた相模原市内の「団子焼き」〔No. 1〕～〔No. 3〕として報告した。そして、調査と報告の趣旨については〔No. 1〕で、講座を実施していた 3 年間における調査全体のまとめと分析は 16 号の〔No. 3〕で行い、その後の平成 19 年（2007）以降も本誌第 17～24 集において毎年の状況を継続して報告中である。さらに、講座に際しての調査全体の意図や調査成果、講座の一環としての博物館活動との係わり等については、「地域博物館における市民による調査の実際－民俗講座「道祖神を調べる会」の活動から－」（『博物館の仕事』8 人の学芸員著 岩田書院刊 2007 年）において別にまとめている。

なお、17 年度には講座参加者の有志が別に「サエノカミの会」を結成し、講座で積み重ねてきたデータを生かして、同年度の博物館開館 10 周年記念特別展「博物館 10 年のあゆみ」の中での民俗分野の展示の一部を担った点も大きな成果であった。

○16～17 年度 「境川流域を歩く」全 16 回。

16 年度全 7 回・延べ参加者 209 名。

17 年度全 9 回・延べ参加者 262 名。

16 年度にはもう一つのフィールドワークを伴う講座「境川流域を歩く」を開始している。これは市域の東側を流れる境川に沿って、源流の一つである町田市大地沢から藤沢市片瀬で相模湾に流出するまで、江の島を含めて市内から町田市・大和市・横浜市・藤沢市域を境川の右岸・左岸を辿りながら南下したものである。

○18～19 年度 「新市域を歩く～津久井町～」全 15 回。

18 年度全 9 回・延べ参加者 225 名。

19 年度全 6 回・延べ参加者 141 名。

17 年度中に継続して実施していた「道祖神を調べる会」及び「境川流域を歩く」の二つの講座が終了し、18 年度から新たに開始したものの一つが「新市域を歩く～津久井町～」である。相模原市は平成 18～19 年度にかけて旧津久井郡の四町と合併・編入したが、そのうちの旧津久井町を中心に、J R 横浜線橋本駅を出発して津久井町へのルート上にある城山町の一部を含めてフィールドワークを行ったもので、旧市域と比較しながらやはり社寺や石仏・史跡伝承地等を求めつつ、津久井町域の近世に集落があった所を歩いていった。

○18～21 年度 「民俗に親しむ会」全 36 回。

18 年度全 9 回・延べ参加者 476 名。

19 年度全 12 回・延べ参加者 550 名。

20 年度全 12 回・延べ参加者 461 名。

21 年度全 3 回・延べ参加者 114 名。

18 年度に開始したもう一つの民俗講座「民俗に親しむ

会」は、9 年度以来の久しぶりの館内での座学を復活した講座である。野外に出る講座は人気があるものの、応募者が多くどうしても抽選になってしまうことや、体力等の問題があって野外は無理だが民俗的な内容を学びたいとの声に応えることを目的として、基本的に毎月 1 回、館内での加藤の講話と市内のフィールドワークを組み合わせ実施し、講座ではあるが登録制として欠席も自由としたものである。実際の講座では、それまでの例えば「道祖神」のような特に統一したテーマを定めるのではなく、フィールドワークで見かけた地域のさまざまな石仏や社寺・行事等を講話で取り上げて深めていき、次のフィールドワークにつなげていくといった方向で進め、21 年度まで 36 回に渡って実施した。

なお、「民俗に親しむ会」では開催中の 19 年度末に参加者に呼びかけをして、基本的には参加する市民が諸作業を分担しながら活動する市民の会である「民俗調査会」を結成している。民俗調査会は、基本的に平日の毎月第二水曜日に活動する A グループと毎月第四土曜日を活動日とする B グループに分かれ、いずれも民俗分野の資料調査や展示・教育普及等の活動を担いながら、現在も活動は継続している。フィールドワークを中心とする館活動は、次第に民俗講座ではなく民俗調査会が中心となっていくことになるが、こうした市民の会の活動については、紙面の関係でそのほかの会の展開とともに次号で述べることにする。

○22 年度 「市史民俗編を読む～入門編～」全 4 回・延べ参加者 182 名

第 1 回「「民俗」とは何か／市史民俗編の内容と構成」・第 2 回「市史を読む①市域の地域の特徴と民俗〈第二章「景観の変貌となりわい」から〉」・第 3 回「市史を読む②現代社会と民俗」（第六章「年中行事と季節感」及び「社寺の信仰と祭祀」から）・第 4 回「市史を読む③地域の民俗文化の分布」（第一章相模原市の立地と民俗」から）。講師はいずれも加藤。

○22～23 年度 「市史民俗編を読む～展開編～」全 11 回。

22 年度全 7 回・延べ参加者 432 名。

講師は基本的に加藤のほか、第 1 回「相模原の年中行事～さまざまな行事と地域の特徴～」入江英弥國學院大學兼任講師、第 5 回「相模原の小栗・照手伝説」桑 智子日本民俗学会会員。

23 年度全 4 回・延べ参加者 161 名。講師は加藤のほか、外部講師として第 9 回「相模原の神楽と獅子舞」久保田裕道國學院大學兼任講師。

相模原市では、平成 16（2004）年から開始された新しい市史の四冊目として、平成 22 年 3 月に『相模原市史民

俗編』を刊行したが、市史民俗編を市民が実際に手に取り、読んで活用するための手がかりになることを目的に計画したのが「市史民俗編を読む～入門編～」である。この講座では、市史の中のいくつかの章を取り上げ、そこに記されている内容の民俗学的な視点や地域的な特徴を説明しながら進めていった。そして、引き続き「市史民俗編を読む～展開編～」を実施したが、入門編が全4回というようにコンパクトな構成であるのに対し、次の講座では市史民俗編の第11章までの全ての章を順番に取り上げてその内容を掘り下げていくことは入門編の開始当初からの予定であり、その旨を参加者にも伝えて入門編から展開編への参加を募った。さらに、展開編では加藤とともに、実際にいくつかの章の調査執筆に当たった調査員からより専門的な視点に基づいた講義を受けることを併せて行い(これらの回は公開講座として一般参加も可)、加えて、相模原市教育委員会では昭和57年(1982)度から平成6年(1994)度まで毎年一作品ずつ合計13本の民俗に関する記録映画を製作しており、講座開催日の午前中に午後からの講座の内容に関連するテーマや内容を撮影した映画を上映する機会を5回設けた。また、博物館での調査活動で取りためてきたスライドの投影を映画上映とは別の日の5回実施した。

なお、「市史民俗編を読む～入門編～」及び「展開編」開催の開催については、『相模原市史ノート』第9集(相模原市刊、相模原市教育委員会生涯学習部博物館編2012年)において「『市史民俗編を読む』講座の開催～市民が活用する市史を目指して～」で詳述した。

○24年度「民俗学を知る・親しむ」全12回・延べ参加人数1217名。

第1回「講座のガイダンス／『民俗』の捉え方」・第2回「民俗学の視点と対象」・第3回「民俗学と関係諸科学(歴史学・人類学)」・第4回「民俗学から見た日本と地域」・第5回「民俗学の方法(聞き書きをめぐる問題)」・第6回「相模原の民俗調査(柳田國男の内郷村調査他)」・第7回「民俗学の現状と課題」・第8回「民俗学における年中行事の捉え方」・第9回「相模原の年中行事の実例(小正月行事)」・第10回「相模原の年中行事の構成」・第11回「年中行事の分布(相模原地域と津久井地域)」・第12回「新たな年中行事の動向／講座のまとめ」。講師はすべて加藤。

これまでの民俗講座は、いずれも市域及び周辺地域の民俗を資料にさまざまな観点から開催しつつ、年度を越えた数年間に及ぶものも行ってきたが、24年度からは開館当初のようにテーマを設定して年度内に完結するものとした。24年度の内容は、毎年の講座終了時に実施した

アンケートの中に民俗学自体について興味を持ち、さらに知りたいとの意見が散見されたことから、民俗学の視点や対象・方法等の「民俗学入門」の内容とし、後半は特に市域の年中行事の様相や特徴を通して改めて民俗学の視点を学ぶものとした。

○25年度「スライドで見る相模原の民俗」全12回(ただし、1回は大雪のため26年4月に延期して実施)・延べ参加者1129名。

「市史民俗編を読む～展開編～」とともに「民俗学を知る・親しむ」でも年中行事の紹介として多くのスライドの投影を行ったが、参加者アンケートにやはり写真があると話だけでなく分かりやすいとの意見が多かった。博物館では、昭和56年(1981)の建設準備開始以来、さまざまな調査を行ってネガ・ポジフィルムを撮りためており、2万コマ以上のスライドを保管している。この中ではすでに撮影から20年以上経過し、現在では調査することが困難なものも多く含まれている。そのため、当然撮影しやすいものとそうではないものがあるが写されている内容に偏りがあるのはやむを得ないとして、この機会に多くの市域を中心としたスライドを見ていただき、それを元に解説する講座を企画したのであった。内容的には祭礼行事や講などの信仰に係わるものと、年中行事や石仏などが多くを占めたが、最後の二回はそれまでの講座や館活動で行ってきた「大山道を歩く」等のフィールドワークの際に撮影したものを、歩いたルートに従って紹介するなど、全体として膨らみを持たせた構成となるように務めた。

○26年度「地元再発見～各地区の民俗から考える(相模原地域編)～」全10回・延べ参加者977名

26年度については「地元・再発見～相模原地域編～」を開催した。これまでの講座では個別のテーマを定め、また、市域全体を視野に入れて内容を組み立ててきたが、もちろん市域の中でも特定の地区に特徴的な事象も多く見られる。そこで明治22年の町村制で成立した旧市域の七か村(相原・大野・大沢・田名・溝(後の上溝)・麻溝・新磯)を順番に取り上げ、毎回地区の概況や文化財とともに、地域の中での民俗的な視点から注目されるものについて説明していった。また、各地区(7回)に入る前には「相模原市の位置と行政区域」・「開発の町・相模原」・「ある一つの集落(南区下溝古山)からみた地域の生活と民俗」の総論を3回行い、市域の全体的な特徴や民俗についての理解も深めるものとした。

ただ、津久井地域に触れられなかった点は、やはり合併して日も浅い中ではすべての地区ごとにまとめて話することは難しく、大きな課題として残されている。

○27 年度 民俗講話全 10 回・延べ参加者 892 名。

第 1 回「開発」のまち～新田開発・軍都・ダム・宅地化～・第 2 回「畑作と農具を見る視点」・第 3 回「養蚕の展開と人々の暮らし」・第 4 回「酒まんじゅうのお話」・第 5 回「共有の食器と地域社会」・第 6 回「川の文化誌」・第 7 回「どんと焼きからわかること」・第 8 回「さまざまな道とその役割」・第 9 回「相模原の神社・寺院・小祠小堂」・第 10 回「地域の歴史と神社・寺院」。

民俗講座は開館以来、開始当初に応募者を募って開催してきた。この方式に問題があるわけではないが、募集時に見落とすと申し込めないとか年間に渡る長期の内容では参加できない回もあり、それをきっかけに足が遠のくこともあるとの意見も耳にしていた。そのため 27 年度からは「民俗講話」として事前申し込み不要として、聞きたい内容の時に自由に参加できる形式とし、内容的にはこれまでの講座と重なる部分が多いものの、加藤が自らの視点から捉えた相模原という地域のさまざまな民俗について毎回テーマを決めて扱うものとした。

○28 年度 養蚕講話全 5 回・延べ参加者 292 名

第 1 回「文化財記録映画「さがみはらの養蚕」上映と解説」・第 5 回「養蚕の展開と人々の暮らし」講師は加藤、第 2 回「カイコの生物学 卵から蛾（が）まで」秋山学芸員（当館生物担当学芸員）、第 3 回「養蚕の現在～東京都八王子市の事例」神かほり八王子市史専門調査員、第 4 回「最後の養蚕～市内の養蚕事情」菊地原稔津久井町史編集委員会委員。

今年度の 28 年度については、引き続き民俗講話として当日参加自由とするとともに、養蚕をテーマとして開催した。27 年度の民俗講話の中で、第 3 回目の「養蚕の展開と人々の暮らし」の参加者が多かったことなど、富岡製糸場の世界文化遺産登録を受けて、県内でも有数の養蚕地帯であった市域でも養蚕に対する関心が高まっていることを受けて企画したものである。その中では養蚕が人々の生活に与えた影響やさまざまな養蚕信仰など、これまでも比較的多く取り上げてきた内容に加えて、生物としての蚕の生態や、神奈川県内では平成 22 年（2010）で産業としての養蚕が終了したが、最後まで養蚕を行ってきた方からの市内の養蚕の推移と終了に到った経過、市域の養蚕とも深い係わりのある八王子の歴史に詳しく、さらに今も継続している八王子の養蚕の調査を行っている講師から現在の養蚕の状況を聞くなど、講座形式では久しぶりに外部講師を交えて開催した。

なお、28 年度分の 29 年 2～3 月には、民俗の分布を中心にした民俗講話「民俗文化からみた相模原」を全 2 回開催している。

（2）講演会等

大会議室の収容人数から定員 200 名とし、外部講師を招いて必ずしも相模原と直接関係しなくても学術的に興味あるテーマをお話いただく講演会については、特別展・企画展の一環として実施することも多く、毎年ではなく不定期に実施してきた。また、当館では総合博物館の特徴を生かして各分野が共同で講演会を企画しており、これらについても記していくことにする。

○7 年度 「伝承文化の捉え方」井之口章次前杏林大学教授（前掲）

○8 年度 「歴史学から見た相模川」神崎彰利当館館長（前掲）

○9 年度 民俗学講演会（2 回・延べ参加者 100 名）。

相模民俗学会との共催で 2 日にわたり「県央の富士信仰」大野一郎厚木市郷土資料館学芸員、「身近な俗信～親指と霊柩車～」常光 徹国立歴史民俗博物館教授及び、「石仏研究と民俗学」小川直之國學院大學助教授、「くらしの知恵と民俗学」大塚博夫相模民俗学会会員を実施した。

○10 年度 民俗学講演会「近世相模原の庶民と信仰」2 回・延べ参加者 227 名

遊行僧である徳本（講師・西海賢二東京家政学院大学教授）と高野山信仰（同・圭室文雄明治大学教授）に係わる講演会を実施した。

なお、この年は民俗関係ではないが、担当した特別展「浮世絵名品展～春信・歌麿・豊国・北斎・広重～」において講演会や講座等も実施したほか、浮世絵の摺りの実演会も併せて行っている。

○11 年度 民俗学講演会「道祖神とその信仰」・参加者 200 名

いわゆる道祖神の歴史と性格及び、神奈川県内の道祖神信仰の特徴についての講演会。講師・倉石忠彦國學院大學教授、同・小川直之國學院大學助教授。

この年も担当した特別展「描かれた農耕の世界」で講演会「四季耕作図から見えるもの」講師・河野通明神奈川県大学教授、「農民文化と農耕図」同・佐藤常雄筑波大学教授を行っている。なお、いずれの特別展・企画展に際しては展示解説を行っている。

○12 年度 民俗学講演会「里修験の歴史と展開」・参加者 131 名

里修験の歴史と相模の里修験をテーマとしたもので、講師・宮本袈裟雄武蔵大学教授、同・鈴木良明神奈川県立歴史博物館学芸員。

ほかに収蔵品展「職人の道具」の関連事業として実施した文化財記録映画上映会「相模原の職人～下駄作り～」において、小林梅次前相模原市文化財保護委員による解

説と講演を行った。

また、12年度は博物館連続講座「地域を見る眼」として、人文系担当職員の研究成果の発表と外部講師の講演を組み合わせた企画があり、民俗分野では第5回に「歴史と民俗」として福田アジオ神奈川大学教授が講演し、併せて第10回に加藤が「フィールドワークから見た相模原」と称して話した。

○13年度 県下の博物館が東海道宿駅制度400年を記念して交通に関する展示を一斉に行ったが、当館で開催した特別展「“道”再発見～道の役割とその移りかわり～」において「近世の道とその役割」（講師・神崎彰利当館館長、参加者87人）、「鉄道の敷設と地域社会」（同・老川慶喜立教大学教授、79人）、「館長が語る“諸街折絵図”」（同・神崎彰利当館館長、54人）を行っている。

○14年度 博物館のすべての分野が順番で学芸員の研究成果や外部講師による講演を行う「日曜講演会」が月に一度のペースで開始され、民俗分野では、収蔵品展「講中の共有道具」と関連して第5回の日曜講演会に「料理文化と食器」（講師・原田信男国士舘大学教授、参加者55人）を実施した。また、民俗講座「道祖神を調べる会」でも外部講師による講演を行ったことは前述した。

○15年度 第17回日曜講演会で「道祖神の火祭り～神奈川県内の事例を中心に～」浜野達也平塚市博物館学芸員（民俗講座「道祖神を調べる会」と合同、参加者160名）、第22回「相模の日本武尊伝説～大沼の日本武尊“火難伝承”を巡って～」（入江英弥國學院大學講師、200名）を実施した。

○16年度 日曜講演会では、第25回「相模原の石仏調査」（企画展「相模原の石仏～石仏が伝える地域の歴史～」の関連事業。講師・加藤、参加者198名）、第35回「神奈川県民俗研究」（同・小島環琉球大学名誉教授）を行い、企画展「相模原の石仏～石仏が伝える地域の歴史～」において前記のほか、講演会「石仏調査から分かること」（講師・小川直之國學院大学教授、参加者172人）を実施した。

○17年度 第37回日曜講演会「相模川が結ぶ上流と下流のくらし」（講師・堀内 眞富士吉田市歴史民俗資料館学芸員）、第42回「『榎樓』が語る地域の文化～市民との共同作業から見えてきたこと～」（佐川和裕大磯町郷土資料館学芸員）を行っている。

○18年度 第54回日曜講演会で「市民と調べた団子焼き」（講師・加藤、参加者60名）を行った。

○19年度 第63回日曜講演会で「神奈川県の養蚕の展開」（小泉勝夫シルク博物館専門員、参加者63名、企画展「蚕を育て、糸を売る～相模原の養蚕製糸～」の関連事業）

を行うほか、同じく企画展での展示講話として「横浜開港と地域の人々の動向」（講師・西川武臣横浜開港資料館調査研究員、参加者32名）及び「養蚕信仰と望地弁天」（同・鈴木良明神奈川県立金沢文庫長、40名）、「中野の町と川和稿」（同・大塚喜一津久井町史編さん委員会委員長、44名）を行った。

なお、相模原市史編さん担当が博物館に置かれていることにより、市史編さん事業に係わる講演会が毎年実施されており、市史民俗編の関連として「相模原の民俗—その特色をどう見るか—」（講師・小川直之相模原市史編集委員〈國學院大学教授〉）を実施している。

○20年度 第73回日曜講演会として、「鈴木重光と内郷村調査～民俗調査ことはじめ～」（講師・小島環琉球大学名誉教授、参加者83名）を行ったが、これは津久井郡旧四町の相模原市への編入後の企画展「みてみて津久井ただいま調査中！！ 第2期～津久井地域の歴史と文化～」における関連事業でもあった。

○21年度 この年は横浜開港150周年と関連するものとして企画展「市民と歩いた横浜への道」を行ったが、企画展では、市内（JR中央線相模湖駅）から横浜市中区の横浜開港資料館まで、民俗調査会Bの会員がフィールドワークをしながら13回に渡って歩いていき、その見聞した内容も展示内容に取り込んだ。そして、関連事業として、第81回日曜講演会「横浜開港と生糸が運ばれた道」（講師・西川武臣横浜開港資料館主任調査研究員、参加者155名）を行った。さらに、「市民と歩いた横浜への道発表会」（3回・延べ参加者147名）を行い、フィールドワークの結果を、第1回相模湖駅～緑区橋本・第2回緑区橋本～横浜市中山町・第3回横浜市中山町～横浜市内というように地域を区切って3回に分けて民俗調査会会員が口頭発表した。調査会の会員は展示準備とともに発表会も担当し、大変ではあったが現在の市民目線からの展示をすることができ、充実した内容となった。

なお、「市民と歩いた横浜への道発表会」を含むこの企画展の内容や民俗調査会の活動については、本誌第19集（2010年）において「歩く・聞く・見る・展示する～秋季企画展「市民と歩いた横浜への道」開催記録と民俗調査会の活動～」として報告している。

○22年度 通算で85回まで数えた日曜講演会に代わり、22・23年度には講演会に限定せずに各分野の体験教室なども組み込んだ「博物館の日」を毎月第四日曜日に実施したが、その第6回として「相模原の年中行事」、第10回「相模原の小栗・照手伝説」（いずれも前述の民俗講座「市史民俗編を読む～展開編～」の中で実施）を行った。

○23年度 前年度と同様に、民俗講座「市史民俗編を読

む～展開編～」において、第2回博物館の日の講演会として「相模原の神楽と獅子舞」（前述）を行った。

○平成24年度 24年度からは久しぶりに民俗講演会を再開し、この年には「生老病死の今―災害から考える生死の民俗」（講師・板橋春夫國學院大學兼任講師、参加者55名）を行った。

○25年度 民俗講演会として「柳田國男と内郷村調査」（講師・小川直之國學院大学教授、参加者100名）を実施した。

○25～26年度 蔵の中の世界～市民の力で博物館資料へ～「展示を語ろう」（25年度2回・延べ参加者238名、26年度3回・延べ参加者433名）。

25年度には「蔵の中の世界・福田家資料紹介～市民の力で博物館資料へ～」及び「埋もれた“モノ”に光を！・津久井郷土資料室資料紹介③～市民の力で博物館資料へ～」の二つの収蔵品展を実施した。前者は南区下溝の旧家の蔵の中のものの寄贈に伴い、それらを整理するために生まれた市民の会である「福の会」が担当し、蔵の中にあったさまざまな民具類を展示したものである。そして、会期中に2回ほど展示作業に当たった会員が展示説明をする「展示を語ろう」を行い、来館者に資料の来歴等を説明する機会とした。26年度にも「蔵の中の世界②～市民の力で博物館資料へ～」を実施してやはり3回の「展示を語ろう」を開催した。

○25年度 埋もれた“モノ”に光を！・津久井郷土資料室資料紹介③～市民の力で博物館資料へ～「展示を語ろう」（4回・延べ参加者511名）。

25年度に実施した後者の収蔵品展は、旧津久井郷土資料室に未整理のまま保管されていた膨大な資料を整理し、目録化することを目的に設立された市民の会である「水曜会」が、やはり整理の成果を広く示すために23年度から行った展示である。25年度は三回目の展示で、23・24年度については会期中の日曜日に来館して対応できる会員が展示室で適宜説明をしていたが、25年度には福の会と同様に「展示を語ろう」として決まった日を設定して展示解説を行った。

なお、25年度開催の二つの収蔵品展と「展示を語ろう」の概要については、本誌第22集（2014年）で「市民の会」による展示の記録～「福の会」及び「水曜会」の平成25年度収蔵品展～（執筆者：小澤葉菜・福の会／加藤隆志・水曜会）で報告している。

○26年度 民俗講演会「神奈川県と道祖神信仰」（講師・倉石忠彦國學院大學名誉教授、参加者108名）を実施した。

○27年度 この年は、「神奈川県の富士信仰～祭神のイメージを巡って～」（大野一郎厚木市郷土資料館長、参加

者83名）及び「着物の声が聞こえる」（宮本八恵子日本民具学会理事、参加者52名）の二つの民俗講演会を実施した。

○28年度 民俗講演会「相州大山信仰の展開と民俗」（田中宣一成城大学名誉教授、参加者92名）を実施している。

（3）体験教室等

○8～9年度 機織り実演会（いずれも2回、延べ参加者8年度240名・9年度120名）

講座や講演会以外の活動として、もっとも早く企画したのが平成8年度の「機織り実演会」である。市内にはかつて機織りが行われていた伝承があるものの、実際に機織りができる方は見られなくなっていた。しかし、田名地区に在住されていた故・大谷タケさんは、八王子の機屋で技術を学び自宅で機織りをされていたため、館で機織りを行って多くの方にその技術に触れていただくことを目的に企画したものである。さすがに高機の機織り機を運ぶことは物理的に不可能で、大谷さんが別に所有されていた小さな簡易機織り機械を用いた。会場には大谷さんが実際に織られた反物や着物、あるいは小物などを展示したほか、写真撮影させていただいた糸の仕込みから機織りに到る作業の工程をパネルで紹介した。

○10～16年度 糸取り・機織り実演会（各年度とも2回・延べ参加者10年度250名・11年度300名・12年度300名・13年度300名・14年度310名・15年度350名・16年度240名）

当初は、大谷さんが機織りをする状況を回りから見ながら数名の希望者に体験していただくのが中心であり、10年度からは機織りとともに大谷さんが技術を有していた繭からの糸取りを併せて組み入れ、機織り・糸取りともに多くの来館者に体験していただくことを主とした。毎年夏休み頃に行われる300名前後が参加する大人気の企画であったが、大谷さんの体力的な点と他に依頼できる講師が見当たらなかったことから16年度で終了となった。

○9～13年度 酒まんじゅう作り教室（9年度2日・延べ参加者77名、10～13年度もいずれも2回・延べ参加者10年度58名・11年度64名・12年度64名・13年度70名）

糸取り・機織り実演会よりは短い期間だが同時期に実施していたのが「酒まんじゅう作り教室」である。相模原周辺では、特に夏場の祭礼や盆などに酒種を作って膨らませた酒まんじゅう作りが盛んで、今では各家で作られることはかなり少なくなっているが、現在でも和菓子屋などで販売されているほか、市内のいくつかの公民館などでは酒まんじゅう作りの講習会が開かれている。博

博物館でも地域の民俗文化に触れることを目的に、公民館等での講師を依頼されていた二名の女性の方をお願いして企画したものである。館には公民館などと異なり調理室はなく、さまざまな理由により30名ほどの定員制とせざるを得なかったがいずれも数倍の申し込みがあるなど、これも夏場を実施する大人気の企画であった。酒まんじゅう作りには、基となる酒種が重要であり、初年度は酒種作りとまんじゅう作りを併せて二日としたが、酒種は米と水・こうじを桶に仕込むだけでほかに作業はなく、一日目はほとんど説明となってしまうため、次年度からはなるべく多く方に体験していただくために、酒種は講師が用意したものを使ってまんじゅう作りだけを二回別々に実施するようにした。それでも例えば熱源を別に用意するなど準備が大変であり、13年度で区切りをつけて終了した。

○12年度 博物館の裏方（全7回）

この年度には、博物館体験講座「博物館の裏方」を実施し、各分野で扱う資料の収集や整理方法の特徴等について担当学芸員が順に説明しており、加藤も「民俗分野の仕事」を担当した。

○12年度 大山独楽の色付け体験（1回・参加者25名）
体験的な企画では、12年度に実施した収蔵品展「職人の道具」に併せて、電動轆轤を用いた独楽の色付け体験を実施している。相州大山の麓には独楽作りをする木地師が現在も在住し、この大山独楽作りの職人に依頼した。収蔵品展「職人の道具」は、開催時期をずらして当館と大磯町郷土資料館・厚木市郷土資料館が合同で行ったものであり、三館ともにこの色付け体験を行っている。

○13年度 ウォークラリー～市内の道や坂を歩く～（2回・延べ参加者33名）

収蔵品展「職人の道具」以降、体験的な内容は講演会とともに企画展の関連事業として行うことが多く、13年度の特別展「道 再発見～道の役割とその移りかわり～」では「ウォークラリー～市内の道や坂を歩く～」を企画した。展示資料だけでなく、実際に野外に出て歩きながら道が果たしてきた役割を考えるための企画で、旧道で比較的古くからの雰囲気が残されている道や坂を選んで歩いて行った。

○15年度 フィールドワーク 石仏を見る（1回・参加者29名）

15年度末から16年度にかけて実施した企画展「相模原の石仏」の中では、講演会や展示解説とともに「フィールドワーク 石仏を見る」を実施した。これも展示だけでなく現地で石仏を観察することを狙いとしたが、残念ながら2回のうち1回は雨天中止となってしまった。

○17年度 モノの扱い方を知ろう（3回）

17年度には開館10周年を迎え、すべての分野が参加する形で特別展「博物館10年の歩み」を行ったが、その関連事業として、「民俗の日」などそれぞれ担当日を設けて実技を伴う内容を実施した。民俗の日では「モノの扱い方を知ろう」で、梱包や掛軸の巻き方などを3回行った。なお、開館記念日である11月20日と前日の19日には、館全体の「博物館の日」として、プラネタリウムの無料公開や常設展示の解説及びクイズラリー、バックヤード公開等の企画を行っている。

○18年度 民俗資料の整理（2回・延べ参加者26名）

17年度の特別展との関連で18年度には、やはり各分野が持ち回りで「博物館の仕事公開日」として資料整理等の工程を見ていただき、体験する企画を実施した。民俗分野では「民俗資料の整理」として、資料化に伴う資料への受入番号の注記などの作業を取り上げた。

○19年度 繭うさぎ作り（2回・延べ参加者313名）、真綿作り（1回・参加者100名）、組紐作りと紐結び（1回・参加者80人）、糸取り（1回・参加者138人）

19年度の企画展「蚕を育て、糸を売る～相模原の養蚕製糸～」の一環として、やはり前述の講演会や展示講話、展示解説とともに行ったのが「繭うさぎ作り」「真綿づくり」「組紐作りと紐作り」「糸取り」等の各種の体験学習である。繭うさぎ作りや真綿作り・糸取りは横浜市のシルク博物館で同様の講師を務められている方、組紐作りと紐結びは組紐の製造工場を営んでおられる方に依頼し、館でのさまざまな活動に係わるボランティアである市民学芸員の協力を得て実施したもので、いずれも多く参加者があった。

○20年度 フィールドワーク「甲州道中歩き～民俗編～」（1回・参加者33名）、繭うさぎ作り（2回・延べ参加者152名）

津久井郡四町の編入を受けて行われた20年度の企画展「みてみて津久井ただいま調査中！！ 第2期～津久井地域の歴史と文化～」では、関連事業として「つくい探訪会」と繭うさぎ作りを行った。つくい探訪会（会期中自然系2回・人文系3回開催）は、新市域となった地区を歩いたもので、そのうちの人文系の1回分を民俗調査会Aが担当し、「甲州道中歩き～民俗編～」として甲州道中の旧道をJR中央線の相模湖駅から藤野駅までフィールドワークを実施した。

○21年度 繭うさぎ作り（2回・延べ参加者267名）

前述のこの年に開催した企画展「市民と歩いた横浜への道」の関連事業として「市民と歩いた横浜への道発表会」とともに開催したものである。

○23～28 年度 民俗探訪会（全 10 回）

23 年度 第 1 回民俗探訪会～新磯南部を歩く～（参加者 35 名）

24 年度 第 2 回田名地区を歩く（参加者 41 名）

25 年度 第 3 回下溝地区を歩く（参加者 41 名）・第 4 回相模原市相原・町田市相原町を歩く（参加者 47 名）

26 年度 第 5 回上溝から下溝地区を歩く（参加者 39 名）・第 6 回淵野辺周辺の伝説の地を歩く（参加者 34 名）

27 年度 第 7 回上鶴間地区の石仏を見る（参加者 40 名）・第 8 回磯部北部地を歩く（参加者 26 名）。

28 年度 第 9 回大島地区を歩く（※雨天中止のため、参加希望者に資料のみ配布）・第 10 回鳩川の流れて歩く（上溝～下九沢・参加者 38 名）

23 年度末から新たに開始したのが「民俗探訪会」である。前述のように 19 年度末に民俗調査会を組織してさまざまな活動を展開してきたが、中心とする活動は市内外のフィールドワークである。このうち調査会 A の会員がフィールドワークした内容を生かして、別に市広報紙などで募集した市民を担当学芸員である加藤とともに案内して歩くのが民俗探訪会であり、春と秋にあまり他の史跡巡りでは行かないような場所を含めて地域やテーマを設定し、事前のコース設定のための下見も行って実施した。

○25～28 年度 繭うさぎ作り（各年度いずれも 1 回・参加者 25 年度 180 名・26 年度 200 名・27 年度 200 名・28 年度 200 名）

「繭うさぎ作り」は館が用意した繭を作って参加者が市民学芸員の指導の基にうさぎなどを作り、作ったうさぎは持ち帰ることができるものである。19 年度の企画展をきっかけとして始まり、関連事業として 21 年度まで行われたが、25 年度からは単独の事業として位置付けて継続的にいき、館が用意できる繭数に応じて先着順で参加できるものとしている。近年はいずれの年も予定された終了時間を待たずに、用意した繭がなくなるほどの人気のある企画となっている。

この 20 年あまりの民俗分野の教育普及活動の動向を振り返ると、講座では開館三年目までの毎年内容を決めてそれに係わるものについて数回に分けて外部講師や担当学芸員である筆者が話す座学形式から、参加者とともに野外に出て地域のフィールドワークを主体とするものに大きく変えていったことを指摘できる。これは当館のような地域に存在し、活動を展開する博物館の特徴が発揮される講座とは何かを考えた結果、県内をはじめとする多くの博物館でも行われている、実際に野外に出て行き、

参加者自らが地域を歩きながらさまざまな点について見聞し、場合によって調べていくフィールドワークを行うものを選択したものである。そして、フィールドワークを主とする活動を 10 年ほど続けた後で、次第にこうした活動は市民の会である民俗調査会が中心となり、民俗調査会での定例化された活動とは別に、講座は毎年テーマに工夫を凝らしつつ座学を行うというように分けて実施するようになっていく。

また、講演会は特別展や企画展での関連事業として行ったものと民俗講演会として単独に実施したものがあり、特に後者は富士信仰等の山岳信仰や石仏などに係わるものが多い。体験関係は糸取り・機織り実演会と酒まんじゅう作り教室を長らく行ったが、現在は繭うさぎ作りを継続している。当館では、総合博物館の特徴を生かして多くの分野が加わって博物館で行われている諸作業の公開・体験が行われ、さらに、平成 15 年度から、主に小学校 3 年生の授業で活用できるような道具を展示する学習資料展「大地さんと未来さんが見つける～ちょっと昔のくらし～」を毎年開催して、学習資料展の関連事業として「チャレンジ体験」などのさまざまな体験メニューを実施しており、体験を伴う事業は学習資料展でのものを中心となっている。

開館以来、各分野においてさまざまな教育普及活動が展開され、ここでは筆者の担当する民俗分野のみの記載となったが、いずれにしてもこうした活動に終わりはなく、今後とも継続して行われなければならない。そのためにもこれまでの経過を振り返り確認しつつ、また新たな魅力ある活動内容を実施していくことが求められる。本稿はその作業の一環として行ったものである。

